町民文芸

只見短歌会　四月詠草

大塚栄一　指導

残雪が二尺もあるとふ山峡の客に水仙切りて持たすも　古川　英子

雪消えの一際遅きわが庭に水仙クロッカス漸く芽ぶく　馬場　八智

一キロにも満たずに生れし女の孫も危ふさ乗り越え成人式迎ふ　渡部ゆき子

春日射し桜の開花背に受けて大根干しに今日もいそしむ　関谷登美子

鶴賀城の土産と桜の花びらを病みゐる母の手のひらに載す　新国由紀子

通りにて遊べる子らの足音の軽くなりつつ春は来にけり　小倉キミ子

連休に施設より帰る子の布団日当りの良きベランダに干す　五十嵐夏美

風邪に臥すわが枕辺に幼孫絵本逆さに読みくれるらし　目黒　富子

春早き水仙の花我が家の前の道辺に盛りと咲きぬ　渡部ヨリ子

二階まで水害に及びし独り居の友を呼びきて日々を過ごすも　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　五月例会

目黒十一　指導

コヒガンの名を得しバスの桜狩　信

修行僧土産を買うか桜もち　邦男

かたくりの咲いて乱るる部落跡　邦夫

湧き水の祠の上の八重桜　順子

残る鴨十指にあまる只見ダム　リウコ

鉢の梅香りを満たす仏の間　都

トロッコの列車の風や田植時　一穂

初夏やエプロンのまま遠く来て　洋子

路のとお倖せの香のつと流れ　礼

春の店青年軽くレジを打つ　恒夫

仏壇の中明るくて春彼岸　吉児

入学式注文つけてシャッターおす

取り残る路の薹より力受く

若夫婦へ種蒔桜満開に

六地蔵濡れつつ受くる花衣

摘みて来し四つ葉のクローバーアンの本

さめやらぬ夢や峠に木の根明く

まなうらにみるみるふゆる山若葉

村絵図と変わらぬ山河五月来ぬ

隠し田と言うもかなしき夏の雨

青空やバラ馥郁と香を放つ

風立ちて玉解く芭蕉水ひかる